



# 多元文化論系 2017 年度版

プログラム ・ ゼミ紹介

# 目 次

■ 主任からのメッセージ

■ プログラム紹介

■ 論系スタッフ一覧

■ 2018 年度 開講予定ゼミ

■ 論系情報



# 主任からのメッセージ

## まさに時代は多元文化

小田島 恒志

グローバル化ということが言われるようになって久しいですが、当初は某大国を中心にまるで世界が一元化するのではないかという印象がありました。それがここに来て、むしろ逆で、様々な文化が様々な地域に浸透し、そこで独自の文化が形成されているのだということが浮き彫りになってきました。例えば、「日本文化」と一言で言っても、そこには様々な文化が入ってきたり、出て行ったりしているのです。出て行ったり、というのは奇異に聞こえるかもしれませんが、海外で日本文化的な(と思われている)ものに触れて驚くこともあるのではないのでしょうか？

本論系名の「多元文化」を英語で表現する際、「multi-culture(マルチ・カルチャー)」とはせず「trans-culture(トランス・カルチャー)」と呼ぶことにしました。様々な文化が単にモザイク的に共存しているのではなく、時代や地域をトランスして(貫いて・横切って)いる状態を表すためです。その状態こそ本当の意味でのグローバル化であり、文化の多元性を、あるいは多元的な文化を学ぶことこそ、今の世界を生きる我々に求められていることだと言えるでしょう。

本年度から新たに、日本文化をグローバルな視点で学ぶ「国際日本文化論プログラム」を加え、多元文化論系のプログラムを改編しました。様々な文化に様々なアプローチを試みて、カルチャーをトランスする担い手となってください。

# プログラム紹介

2017 年度から「英語圏文化プログラム」、「ヨーロッパ文化プログラム」、「アジア文化プログラム」、「中東・イスラーム文化プログラム」、「国際日本文化論プログラム(Global Studies in Japanese Cultures Program＝略称 JCulP)」の5つのプログラムに再編されました。

多元文化論系では、ほかの論系とは違って、教員やゼミがどれか一つのプログラムに所属するという形は取っていません(JCulP を除く)。学生の皆さんは複数のプログラムから自らの関心に合わせて自由に履修科目を選択することができます(JCulP の科目も含む)。

## 英語圏文化プログラム

明治期日本の先覚者たちの多くは英語を通して外国文化を学び、英語で日本からの文化的な発信を行いました。21 世紀の今、英語圏世界は地理的にも大きく広がり、私たちが受容する文化もハイカルチャーから民衆文化まで広範囲に及びます。先人の進取の気概を継承しつつ今この時代に固有の課題に取り組もうとする人たちに、本プログラムは多様かつ必須の科目群を提供します。また、日本からの発信力を養う上で、英語教育のあり方を検討しつつ総合的な英語能力の向上をはかることは不可欠ですが、それもまた本プログラムの重要な目標となっています。

## ヨーロッパ文化プログラム

地中海の古典的な文化を基礎とすることなしに今日のヨーロッパの文化はあり得ません。また、そのヨーロッパの文化は、周辺世界からも多くのものを吸収し、ときに対峙しながら発展を見てきました。ヨーロッパ世界とその周辺世界とを並べてみても、それらの間の微妙な移り変わりや重なり合い、そして、差異の存在にあらためて私たちは気づかされます。それらの世界の歴史的・地域的に多様な要素を認識しつつ、時間的・地域的差異と共通の要因を見きわめていくことは、現代の日本社会の問題をグローバルな視点から考えるうえでも必須のことと言えるでしょう。

# アジア文化プログラム

現在の世界情勢のなかで、アジア諸地域の間に関わる文化や歴史に関する深い相互理解を形成することは、極めて緊急性の高い重要な課題です。アジア文化プログラムでは、この課題をみずからのものとして引き受け、日本を含むアジア地域における、古代から近現代に至る文化の諸事象や古典の叡智、文化交流について、文学・言語・思想・政治・宗教・社会・芸術・歴史学などの諸分野を広く視野に収めつつ、多角的にアプローチします。時には原典資料にあたりながら、複雑に入り込んだアジア世界の多様性・多元性に向きあい、そこに宿る個別性・普遍性について深く考察することを目指します。

## 中東・イスラーム文化プログラム

### 【2017 年度から新設】

このプログラムでは、中東・イスラームに関する知識を深めるとともに、氾濫する情報を見極めるリテラシーを養い、この世界の過去・現在・未来について考察することを目指します。そして、「中東」や「イスラーム」に関連することであれば、何でも研究テーマにできます。その「中東」と「イスラーム」ですが、「中東」は地域概念であり、その中に暮らすキリスト教徒・ユダヤ教徒など、イスラーム教徒以外の社会も研究対象となります。一方、「イスラーム」は宗教であり社会システムですので、それに関連することであれば、欧米でも、中南米でも、南・東南アジアでも、アフリカでも、東アジアや日本でも、地球上を研究対象とできます。それらの歴史・文化・社会について、国際的視点から深く掘り下げます。

## Global Studies in Japanese Cultures Program (JGuIP)

### 国際日本文化論プログラム

### 【2017 年度から新設】

日本文化を世界的な視野のもとに学び、かつその成果を広く世界に向けて発信できる人材の育成を目指して発足したプログラムです。日本学生は英語で教授される授業のみで卒業要件を満たすことを原則としますが、他の授業を履修することもできます。海外学生は日本語を学びつつ、英語で教授される専門科目の履修によって卒業要件を満たすことが可能ですが、もちろん他の授業も履修できます。どちらも、文化構想学部の特長にのっとり、日本文化だけでなく様々な文化や学問を学ぶことも可能です。

# 論系スタッフ (2017 年度)

## ■ 多元文化論系専任教員

安藤 文人 *ANDO Fumihito* (JCulP)

比較文学、ナラティブ研究



伊川 健二 *IGAWA Kenji*

中近世日本と外部世界の関係史



井上 文則 *INOUE Fuminori*

古代ローマ史



☆大稔 哲也 *OTOSHI Tetsuya*

西アジア史、中東社会史



小田島 恒志 *ODASHIMA Koshi*

現代イギリス小説、現代英米演劇、翻訳論



河野 貴美子 *KONO Kimiko*

東アジア文化交流



☆佐藤 尚平 *SATO Shohei*

中東地域研究(アラビア半島現代史・湾岸現代史)

イギリス帝国史研究



高井 詩穂 TAKAI Shiho (JCulP)

日本古典文学、近世芸能、比較文学



高屋 亜希 TAKAYA Aki

中華文化圏の同時代文化

東アジアの同時代文化交流、20 世紀以降の中国現代文学



エドワード・チャン Edward CHAN

American literature, film, and culture



タニア・ホサイン Tania HOSSAIN

英語教育学(社会言語学、応用言語学)



パウ・ピタルク・フェルナンデス Pau PITARCH Fernandez (JCulP)

日本近代・現代文学、比較文学、物語論



源 貴志 MINAMOTO Takashi

19 世紀ロシア文学、日露文化交流史、ロシア出版文化



村井 誠人 MURAI Makoto

北欧史



森 由利亚 MORI Yuria

中国宗教思想(道教、民間信仰)



柳澤 明 YANAGISAWA Akira

東アジア近世史(清朝史)



由尾 瞳 YOSHIO Hitomi (JCulP)

日本近代・現代文学、ジェンダー研究、翻訳、比較文学



吉原 浩人 YOSHIHARA Hiroto

日本宗教思想史、東アジア文化交流史



渡辺 愛子 WATANABE Aiko

イギリス地域研究



\* スティーブン・ライアン Stephen RYAN

英語学、外国語教育、教育心理学







## 助教

佐藤 晃 SATO Akira

インド・チベット仏教思想史研究

梅宮 悠 UMEMIYA Yu (JCulP)

英国ルネサンス演劇

柳下 恵美 YAGISHITA Emi (JCulP)

芸術学、芸術文化史、欧米史



## 助手

滝澤 みか TAKIZAWA Mika

軍記物語、日本中世文学

日尾野 裕一 HIONO Yuichi

近世・近代イギリス史

# 2018 年度開講予定ゼミ

## 異文化受容論ゼミ

小田島 恒志  
odashima@waseda.jp

外国の文化に触れるには、単に情報伝達を目的とした媒体以外にも、様々な機会、方法がある。それは、たとえば文学、演劇、映画、音楽、絵画などのように、知識としてではなく直接感性に訴えてくる場合もある。だが、その感性の持ち主がもともと異文化を背景に持っている以上、その伝わり方はどこまで有効なのだろうか。本国の人々が感じているものと同じ感覚で受容しているとは到底言えないのではないだろうか。

では、100%同じように感じることはできないからと言って、それは無駄な行為かといえば決してそうではない。日本人が日本の文化を背景として外国文化を受け止める場合、それがプラスに働くこともあり得るだろうし、伝えようとする人間は、それを効果的に活用する場合もあるだろう。

担当教員自身は英語文化圏の演劇や小説の翻訳作業を通して常に上のようなことを考えている。たとえば、南アフリカの作家アソル・フガートの戯曲を日本で上演した際には、原文から読み取れる様々な文化をいかに日本語のセリフで表わせるか様々なレベルで苦心したが、演劇の場合、言葉で表わしきれない要素を、舞台美術や演出の力で見せることも可能であった。もちろん役者の技量によるものも大きい。とは言え、英語で書かれた原文の中にアフリカンス語が織り込まれている部分に関しては、さすがに伝えきれたとは思っていない。また、アメリカの作家キャムロン・ライトの小説『エミリーへの手紙』の翻訳では、言葉遊びが重要な要素となっていたのだが、これは直訳するわけにはいかず、いろんな意味で原文を裏切らざるをえなかった。

このように、異文化理解と受容が起こる実際の場（たとえば翻訳）において、とりこぼされる要素と、それに対して伝達者（たとえば翻訳家）がいかに工夫を施しているか、実際の作品を通じてのリサーチと、より効果的な伝達／表現法の更なる可能性を模索、提示することが本ゼミの目的である。



現代中国の 100 年におよぶ歴史は、絶え間ない戦争や政治運動により、多くの人々が故郷からの移住、分断といった体験を余儀なくされてきました。また改革開放以降も、自己実現のチャンスを求め、農村から都市へ、内陸部から沿海部へ、さらには海外へ移住する流れは止まることはありません。その一方、近年発展めざましい中国に海外から帰国する流れも顕著になっており、現代中国社会および現代中国文化は、そうした移動という相のもとに考える必要があるでしょう。

このゼミでは大陸地域だけでなく、台湾や香港、さらには日本や東南アジア、遠くアメリカやヨーロッパなど、中国から移住した人々が移住先の諸地域で果たしてきた社会的役割や文化的営為も視野に入れていきたいと思います。その上で、そうした諸地域との交流のもとで展開してきた、現代中国の小説・映画・演劇・音楽など、さまざまな文化現象について一緒に考え、理解を深めていきましょう。

- 中国語の履修は必須ではありません。しかし、日本語資料だけで現代中国について考えることは難しく、ゼミ論のテーマも自ずと限られてしまいます。中国語資料を使うことができれば、自分の力で中国に向きあい、考えることができます。ぜひチャレンジしてください。
- ゼミは3年生と4年生が合同で行っています。3年生は共通テーマと課題図書を決め、全員で講読しています。2016年度の共通テーマは「北京」。春名徹『北京——都市の記憶』（岩波書店、2008年）、ウー・ホン著、中野美代子監訳・解説、大谷通順訳『北京をつくりなおす——政治空間としての天安門広場』（国書刊行会、2015年）などを讀んだ他、北京を舞台にした映画（『胡同の理髪師』など）も見ました。
- 2017年度は「中国のメディア」を共通テーマにしています。柴静著、鈴木将久他訳『中国メディアの現場は何を伝えようとしているか——女性キャスターの苦悩と挑戦』（平凡社、2014年）、西茹『中国の経済体制改革とメディア』（集広舎、2008年）などを讀みながら、中国のメディアが事件や人々にどう向き合い、何を報道したのかという具体的な試み、その背景となるメディアの制度や社会事情について理解を深め、現代中国社会と向き合う視点を獲得することを目指しています。
- ゼミ論は各自やりたいテーマを見つけて取り組んでもらいます。3年生は1月までにゼミ論のテーマを決めて、先行研究のリストを作ってもらいます。4年生はゼミ授業で途中経過報告をしてもらう他、草稿の提出、書き直しの過程を経てゼミ論を完成させます。3年生と4年生が一緒に議論することで、互いに視野を広げ、関心を掘り下げていくことを期待しています。
- 過去に提出されたゼミ論のテーマは文学、映画、アート、スポーツ、メディア、広告、教育、都市政策、食文化、留学政策など、さまざまです。今年度のゼミ生のテーマも、中国映画の日本像、インドネシア華僑の宗教文化、福建省農村の祭祀儀礼、中国の大学受験制度、紅衛兵世代の文革認識など、多岐にわたっています。
- ゼミ全体の行事は新歓コンパなどの他、毎年、4年生が懇親を深めるためのイベントを企画するのが恒例となっています。過去には奥多摩での1泊キャンプ、お台場でのバーベキューもありましたが、今年度はどうなるでしょう？



本ゼミは、日本もしくは中国・台湾・韓国・ベトナムなど、漢字文化圏における前近代の思想・宗教・文化・芸術などに興味を持つ学生を対象に設置します。

あることを学ぶためには、やみくもに進むのではなく、回り道のようなのですが、あらかじめ全体像を知っておくと、結果的に時間を短縮することができます。つまり、ある宗教なり作品なりが、どのような世界観やしくみで成り立っているかを知っておくことが、肝要になります。さらに、あることを議論するためには、対象となるテキストを精確に読解することが前提になります。このゼミでは、そのためのノウハウを提供していきたいと思います。

3年生は、まず漢字文化圏のあらゆる文献を読解するための基礎となる、古典漢文を正しく読むための訓練から入ります。漢文は、東アジアの共通言語として、様々な局面に用いられ、影響を与えているからです。漢文は、基本的な法則と調査方法さえ身につければ、それほど難しいものではありません。難解と言われる四六駢儷文でも、半年ほどでかなり読めるようになるでしょう。辞書の使い方や資料の調査方法ばかりでなく、パソコンを利用した検索方法の指導もいたします。4年生の春学期には、各学生のゼミ論の内容を勧奨しながら、日本の文献を読解します。

夏休みには、国内で原則全員参加のゼミ合宿を行い、研究に対する関心を深めます。また、適当な時期に、中国・台湾・香港・韓国・シンガポールなど、漢字文化圏への研修旅行を実施します。過去には、北京・台湾・香港・深圳に研修旅行を実施しました。ただしこの旅行は、全員参加を強制するものではありません。

本ゼミからは、日本文学・美術史・東洋哲学などへの大学院進学者が毎年のように出ており、希望者に対しては専門的なアドバイスをいたします。また妖怪や漫画についてのゼミ論を書く学生も、何人もおります。要は、学問的な手続きがきちんとしていれば、ゼミ論には何を書いてもかまいません。ここで3年生の時の苦勞が生きてくるので、一年間は修行だと思って付き合ってください。



台湾研修旅行(2017年2月)

## 【学生から一言】

思想文化論ゼミを一言で表すならば、「メリハリのあるゼミ」だと思います。ゼミとしては、3年生は『本朝文粹』、4年生は『今昔物語集』の一部の作品に、注釈をつけ、典拠を探し、現代語訳するという内容です。図書館に通い詰めて資料集めをし、膨大な時間を本や論文と向き合って過ごしますが、適切な図書の探し方をマスターでき、今となってはゼミ論文を書き上げるために、とても有り難いと感じています。実際、苦勞して作り上げた資料はきちんと評価してくださり、また何が足りなかったのか、どのようにすればよかったのかも指摘してくださるので、達成感も一入です。

各学期の終わりには、ゼミ生全員での打ち上げコンパがあり、年2回の合宿でも交流を深めています。全員参加の夏合宿では、1泊2日でゼミ論構想発表や史跡参観、任意参加の海外研修では、台湾や中国などに4〜5日ほど行き、先生の解説付きで現地の史跡や博物館などを参観できます。ゼミ生は歴史好きばかりなので、この時ばかりは勉強を忘れてのびのびと楽しんでいます。

このゼミの専門は、漢文や東洋思想・文化などですが、まるで別ジャンルの論文を書かれる方もいます。もちろん、そういった方々にも先生は対応してくださり、細かなアドバイスをいただけるので、ゼミ選別に困っている方でも大歓迎です。ぜひ一度ゼミ見学にいらしてください！皆様にお会いできることを楽しみにしています。(4年 佐藤由季)



ゼミ合宿 本庄セミナーハウス(2017年9月)

本ゼミが掲げる「漢字・漢文文化」とは、中国を中心として朝鮮、日本など東アジア諸地域に及んだ、漢字・漢文を基として展開してきた学術・文化全般を指しているものです。本ゼミでは、既成の学問の枠組みにとらわれず、古代から現代に至るまでの日本、中国、朝鮮など東アジア各地域におけるさまざまな文化現象を漢字・漢文文化への視点を軸にして考察し、魅力ある新たな東アジア文化論を展開していきたいと考えています。例えば、日本の「仮名文」の世界から「漢字・漢文」の存在意義を考えてみたり、西洋の言語との比較から「漢字・漢文」世界をとらえかえてみたり、いろいろなテーマが考えられます。履修者の皆さんには、さまざまな発想、発言を期待したいと思います。

東アジア地域は、かつて漢字・漢文を共有したことにより、世界的にみても独自の文化圏を形成してきたといえます。授業では、日本を含む東アジア地域共通の文化基盤となっている「漢字・漢文文化」について、その本質、特質、意義、問題点をさまざまな角度から考察することを目標にすえ、具体的には、漢字・漢文文化に関する先行研究を検討、分析するとともに、実際の作品・文献の輪読も行います。また、ゼミ論に向けての準備を進め、構想発表を行っていきます。

なお、2016 年度は、11 月に湯河原で1泊2日のゼミ合宿を行いました。今年度も、ゼミ合宿や博物館見学をかねた文化散歩などの実施を予定しています。



2016 年 11 月 26 日～27 日 湯河原にて



ここ数十年の間に、中国に代表されるアジアの経済は世界経済を牽引する役割を期待される、大きな力へと成長するに至りました。しかし、経済的な成長の背景では、伝統との軋轢や、価値観の矛盾、あるいは没価値的な経済崇拝が懸念され、巨大な不安が醸造されていることも無視できません。アジア世界は自由主義経済の背景をなす近代西欧の合理性と倫理を消化(昇華)して、自分たちの納得いく安定や希望を手にすることはできるのでしょうか？

このような問題への展望を得るためには、アジアの文化の深層に思索の糸を垂らし、そこにどのような倫理や哲学の伝統があるのか、アジアの伝統にはいかなる幸福追求の戦略があるのかを考察する必要があるでしょう。

そうした点を考え、このゼミでは、アジアを基盤とした幸福や価値追求のありようを、(私が中国道教を専門に研究していることから、)主として中国の信仰世界を素材として考えてゆきたいと思います。特に、

- 中国の伝統の中にある自治的な倫理
- 民間信仰、善書
- その近くで発展した道教の信仰、世界観、身体観
- さらに儒教、仏教を含む中国の伝統社会とその価値観

などが主たる探求の課題となります。

授業(2コマ連続時限のうち第1コマ)では、中国の自治的な社会に関わるような重要な研究書を選び、全員で読解します。過去二年は次の著作を通読しました。

2013 年度 滋賀秀三『中国家族法の原理』創文社、1967 年(全 630 頁程度)

2014 年度 夫馬 進『中国善会善堂史研究』同朋舎出版、1997 年(840 頁程度)

来年は、善書や、明清時代の民間の宗教等に関する著作、あるいは受講者の意見をききつつ著作を選ぶなどして読んで行きたいと考えています。

さらに、第2コマでは、ゼミ生による研究経過報告を行っていきます。2コマ連続で出席するようお願いします。



2013 年度 台南宗教施設見学



2014 年度 香港・澳門宗教施設見学

ゼミの担当者である井上は、古代ローマ帝国の歴史を研究しています。特に軍人皇帝時代(235 年～284 年)と呼ばれる混乱期のローマ帝国の政治史と、同時代に流行したミトラス教という宗教に関心を抱いています。ミトラス教のほうは、聞きなれないかもしれませんが、これは牡牛を殺す独特の姿で描かれるミトラと呼ばれるペルシアの神を崇拝する宗教です。ミトラス教は、古代において、キリスト教の最大のライバルであったとも考えられています。

担当者の関心は以上のようなものですが、このゼミでは、古代ローマだけではなく、古代ギリシアを含めて、広く地中海の古代世界に関心がある方であれば、歓迎します。ゼミでは、各自が関心を持ったテーマについて発表しつつ、ゼミ論文作成に向けて勉強していきます。

# 中東・イスラーム文化論ゼミ

## 中東の歴史と文化

このゼミは、文化構想学部で唯一、中東・イスラームについて専門的に学ぶことのできるゼミです。中東・イスラームの歴史や文化について、本格的にかつ楽しく学ぶことを目的としています。

西アジア・中東は古代メソポタミア文明、エジプト文明の展開した地域に重なり、古代ギリシャ・ローマ文明、地中海世界とのかかわりも深いものです。またユダヤ教、キリスト教、イスラームなど諸宗教の揺籃の地でもあります。中世の『アラビアン・ナイト』や「十字軍」、マムルーク朝やオスマン帝国などの歴史、さらには現代の中東情勢から「アラブの春」まで、中東やイスラームを知らずしては語れない事柄が、この世界には数多く存在します。

イスラームということでは、中東をはるかに超えて、中央アジア、アフリカ大陸、南・東南アジア、さらには日本や欧米・中南米のムスリム社会などについても考察の対象となります。アフリカの歴史も当然含まれます。

私は過去 30 年間で、一年も欠かさずエジプトのオールド・カイロというフィールドに住むか通い続けてきました。もうこれで十分だろうと思っても、必ずまた何か発見があります。古代から重層的に紡がれた歴史が折にふれて顔を出し、その文化に飽きることはありません。

また、このゼミの名に「中東」を冠しているのは、イスラーム教徒(ムスリム)だけでなく、キリスト教徒・ユダヤ教徒なども共に中東社会を形成しているという認識にもとづいています。彼らも含めた社会を、総体として捉えます。ですから、人口比でマイノリティである東方キリスト教徒も、研究対象となります。

そしてなにより、中東への旅行や食事、映画や文学など、その文化全般を本格的に愉しんでみませんか？そのための情報提供は惜しみませんし、ゼミとしての実践も予定しています。「アラブの春」の研究も大歓迎です。

このゼミでは国際的な自覚をもって活躍したいと思う皆さんに、イスラームや中東にかんする専門的な知識を授けます。そして、ときには海外からのゲストを交えてゼミを行います。とにかく、伝えたいことがあって、このゼミをしています。ぜひ、主体的に参加してください。ゼミは真剣に、呑み会は楽しくやりましょう。

**ゼミの公式 Twitter 《[https://twitter.com/fustat\\_2014](https://twitter.com/fustat_2014)》や Facebook ページ、HP も存在します。**

**行事** 海外からのゲストによる講演会、アラブ料理店などでの新歓コンパ+追いコン、夏合宿、エジプト・フスタート遺跡の遺物見学会、留学送別会、自由参加で中東関連のコンサートや映画鑑賞、中東からの留学生と交流などの行事を行っています。

**留学** このゼミは新設されてから 4 年目ですが、すでにトルコ、カタール、パレスチナ、クウェート、スペイン、ブルネイ、英国、ヨルダン、アラブ首長国連邦などへの留学を果たしています。今後もいっそう、留学の支援に力を入れてゆきたいと思います。なお、左利きが多いのもゼミの特徴です。

**語学的重要性** 言語の学習も重要です！これは苦痛を伴う義務と考えずに、新たな世界へのパスポートを得るための貴重なチャンスとらえてください。たとえば、1 年生から、アラビア語などの講義を受講することをお薦めします。

### 研究テーマの例

- ・アラブの日常生活、都市史、宗教史など、歴史研究。・「アラブの春」や中東の民衆運動。・イスラーム思想史研究やスーフィズム研究。
- ・中東に広く展開してきた宗教マイノリティについて(コプト・キリスト教、シリア正教などの東方教会やユダヤ教など)
- ・エジプトなど中東の文化研究、ポピュラー・カルチャー研究：映画、演劇、音楽、文学、アート一般、食事など。
- ・中東の民族マイノリティの研究：クルド人、トゥアレグ人など。・イスラーム考古学研究
- ・現代アラブの庶民生活。・日本のムスリム研究、中東から世界への移民研究。
- ・欧米で活躍する中東系アーティストの研究(文学・演劇・映画など)。
- ・中東の聖者崇敬研究、その他の中東を対象とした人類学的研究。
- ・アフリカ史：とりわけ、西アフリカの歴史、例えばマリやトンブクトウの研究。

### 過去 3 年間のゼミ卒業生の主な就職先

- ・商社、旅行会社、大学院進学、流通関連、食品会社、メーカーなど。





当然のことながら、「ユーラシア文化論」などという大それた学問分野が存在し、このゼミでそれを専門的に扱うというわけではない(言語学・歴史学等においてそういうアプローチも存在するが…)。

ここでは、「アジア文化プログラム」「ヨーロッパ文化プログラム」「英語圏文化プログラム」「中東・イスラーム文化プログラム」というプログラムの枠をはみ出するような関心、あるいは、「ヨーロッパ文化プログラム」の範囲のなかであっても、ヨーロッパという枠に必ずしも収まらない、広く(現時点ではそれが「浅く」でもかまわない)旺盛な知的関心に、できるだけ柔軟な対応のできるゼミであることを目指す。

したがって、専門的なテーマをかなりの程度まで(それぞれに多元的・複合的な関心を擁しつつ)掘り下げること前提とするような性質のゼミと比較した場合(とくに特定の言語の資料の読解等々といった面にかかわって)専門的指導という点において、十分なものを保証できないかも知れない。

いずれにせよ、単一の文化の問題への関心に収斂することがなく、なおかつ、一定の範囲のテーマに関心を絞ることにできない人びとの集まり、したがって、相当に多彩な話題の展開するゼミにならざるを得ないものと思われる。しかし、一方ではそこが狙いどころでもあって、いわば、ゼミそのものが、個性的な学生が集まっての「異文化」接触の現場となることが想定されている。

担当教員(源)自身は、ロシア文化(なかでも 19 世紀リアリズム文学)を研究の中心に据え、ロシア文化とヨーロッパ近代文学・芸術との関係、日本とロシアの文化的関係(江戸時代の日・露・欧間の外交関係・文化的交流、洋学と江戸期の芸術の関係、日本近代文学とロシア文学、ヨーロッパ・ロシア・東洋3者間の、近代以降の文学・芸術・思想・学問の交流・相互影響関係など)を日頃関心の対象としており、とくにロシア語・ロシア文化やロシア出版メディア論などについては、大学院入学レベルの専門的指導が可能であるが、このゼミに関しては、このような担当教員自身の専門的守備範囲にはこだわらない。

とりあつかう分野は、文学・芸術・思想・学芸・メディア等々、いずれであってもかまわない。ロシア語以外の言語(東洋、西洋を問わない)については、ゼミ生それぞれが履修する文化構想学部の演習科目や選択外国語科目での研鑽に依存せざるを得ないが、ある程度、ゼミ生自身の焦点が定まれば、それに応じて担当教員も精力的に勉強させてもらおうと考える。

いずれにせよ、多彩な話題と柔軟な発想、また、それらをゼミに集まった〈他人〉＝〈他文化〉同士のコミュニケーションによって深めて行くことを信条としたい。



夏合宿(伊豆高原)の一コマ

# イギリス・アイルランド・英連邦諸国ゼミ

渡辺 愛子  
aiko@waseda.jp

本ゼミでは、イギリス、アイルランドという地理的に近接した地域だけでなく、英連邦諸国、すなわち「大英帝国の旧植民地」という、歴史上で政治的に構築された諸地域を扱います。そこでは、小説、詩、戯曲、映画、サブカルチャーなどに表れた国や地域、時代、政治、民俗、思想などを映し出す文化的表象を具体的に検証していくことになるでしょう。ゼミ生は、上に挙げた研究領域やさまざまな研究手法から、それぞれテーマや材料を決めてリサーチを行い、発表をもとにした個人単位の作業と、これを踏まえた比較、ディスカッションによる共同作業を行います。こうした作業を通して、単純に「英語圏文化」とひと言では括り得ないその多様性、特殊性、差異に注目し、同時に普遍的な側面を特殊事情と見誤ることのないよう、広い視野に立った議論を展開できる思考力を養い、最終的に個々のゼミ論文という形で結晶化させることが、各履修者に望まれます。



昼間のゼミ論報告会  
ではしっかり勉強！  
夜は楽しく親睦会。  
+ 昨年は、BBQ！！





植民地としての過去を持つ多くのアジアの国々では、英語教育政策は常に論争を呼ぶ課題となっていました。政治的な独立を果たしたとは言え、いまだ国づくりの仕事に奮闘中のそうした国々では、国づくりの一環として、グローバル経済と国際政治に参加できるような言語政策を採用しており、英語はこうした政策の中で非常に重要な役割を果たしています。経済的に優位な立場を得ようとしている中産階級の家庭は英語の習得に熱心ですが、多くのアジアの国々は、世界中のさまざまな教育制度の中でも最も難しい課題に直面しています。英語の習得は限られた階層の人々にだけ限定されており、特に地方に住む大部分の人々にとっては、十分な英語の能力を伸ばす現実的な機会がありません。多くのアジアの国々で、英語教育が社会階層の分断を生み出しているのです。このゼミでは、英語がいかにエリートの権力と特権に寄与しつつ、社会の中の不平等を作り上げているかを学んでいきます。

それと同時に、言語と文化は多くの面で深く関連し合っており、言語は人間の価値観や、その所産である文化に影響を与えています。母語以外の言語を学ぶことは、異文化に関する情報や多様な価値観や考え方に接触する機会も増やしてくれます。とりわけ国際語としての英語が、多様な文化へのアクセスの機会を広げてくれることは言うまでもありません。

このゼミでは、皆さんにとって目新しく未知な事柄をたくさん学んでもらいます。クリティカル・リーディングや自分の考えをまとめたり、簡潔明瞭かつアカデミックな文体で英語の文章を書いてもらいます。読んでもらう資料から、皆さん自身の課題を見つけ出してください。このコースで対象としているのは、社会的およびグローバルなレベルでの英語に関わる諸問題です。歴史的な文脈におけるグローバルな英語の発展や、第一および第二言語としての英語の地位、バイリンガリズムや第二言語習得、そして今現在、多様な社会の内外で生じつつある英語を始めとする外国語教育に関わる諸々を検討していきます。そこを端緒に、多種多様なメディアを用いてこうした疑問を探求していきます。学術および様々な一般記事も非常に有用となるはずです。ゼミのテキストだけでなく、皆さんの興味関心もこうした問題を解決したり掘り下げる助けとなるでしょう。映画や雑誌、学会誌、論文、書籍、そしてもちろん、インターネットも対象とし、そうした資料類を用いて、自分の考えを深め、分析する力を伸ばしていく方法を学びます。

卒業後に国際的な仕事、通訳/翻訳業、外国語教育関係の仕事等につきたいと考えている学生には有益なゼミだと思います。また「英語の運用能力を身につけたい」「世界の中の英語の役割を知りたい」「言語と文化の接点について学びたい」という学生の期待にも応えることができます。



(NOTE: The content and format of this seminar has changed from previous years.) The seminar will be an introduction to American studies, which is an interdisciplinary field of study focused on various aspects of American culture. We will organize our study of America around key topics (many of which are overlapping), such as national identity, race and ethnicity, class, gender, sexual orientation, disability, globalization, immigration, regionalism, foodways, consumerism, power and authority, countercultures, and so on. The seminar will emphasize “active learning,” meaning students are expected to actively contribute to the class through participation, discussion based on homework assignments, presentations, among other things. The objective is to prepare students for researching and writing the graduation thesis.

Some things for you to consider if you are interested in this seminar:

- 1) You should be willing to speak, write, and listen in English, as the course will be entirely in English.
- 2) You should be prepared to participate in discussion (in other words, talk, think, and listen) every week.
- 3) You should be prepared to do work outside of class (i.e., homework), including reading, writing, and preparing presentations.
- 4) You should be prepared to learn and conduct academic research in the library, through fieldwork, and on the Internet.
- 5) You should be prepared to write your graduation thesis entirely in English, including doing research in English. The topic of the thesis must be related to American culture.

このゼミは、日本史、とりわけ文化史の諸問題を広範に探求、議論する場所として、今年度新設されました。ここにいう「文化」は、芸術や文学などの狭義の内容に留まらず、特定の社会で共有される生活様式に含まれるものといえます。時代は古代から現代まで問いませんが、歴史系のゼミとして、時系列にそって事象の推移を追求する方法をとっています。

今年度は3年生が中心の構成ですが、6月段階では古代の天皇や信仰、中世の茶道、近世の藩財政、遊郭、新撰組、近代の政治史、歌舞伎作者、現代の芸能、お笑いブーム、ゆるキャラ、そして日韓関係通史など硬軟とりまじえて、さまざまな関心が語られています。春期は、各自の関心にそった研究発表、秋期は論文の添削、歴史学の基礎である史料論、日本文化史の金字塔的著作である津田左右吉『文学に現はれたる我が国民思想の研究(1～8)』(岩波文庫版、1977～78年)の輪読、さらに希望者には和製漢文の講読など技術的な面を中心とした内容になる予定です。

教室での発表・議論以外のイベントは、懇親会のほか、6月には築地市場見学、7月にはすみだ北斎美術館の見学を実施したほか、今後は歌舞伎幕見、相撲観戦を計画中です。このほか、江戸文化に関わるものを中心に、受講者の関心にあわせて、適宜実施していく予定です。

このような枠組みのなかで、受講者は極力自由に問題を設定し、発表や議論を通じて考察を深めていきます。そうした活動を通じて、学問としての歴史学の方法論に触れ、論文の完成を目指します。

## 【3年生・2018年度の予定】

- 春期： 研究開始の契機として、関心のあるテーマを抽出し、それに関する研究史を整理、発表します。また、歴史学の基礎となる史料について、参考文献を発表形式で輪読することにより理解を深めます。
- 秋期： 夏季休暇中に各自の研究関心を確定させます。秋期には、関係する研究史をまとめ、文章化して発表し、論文執筆の基礎とします。可能であれば、論文全体の構成を提示し、関連する原典史料情報を収集、読解を進めます。

## 【4年生・2018年度の予定】

- 春期： 論文全体の構成を確定させるとともに、学内外の関係者による講演や、関係施設の訪問を通じて、江戸を中心とした日本文化に対する認識を深化させます。
- 秋期： ゼミ論文(800字×25枚以上)執筆を具体化させ、その過程で生じる具体的な諸問題を検討し、論文の仕上げを支援します。



2018 年度からゼミを開講します。ナショナリズム(国民主義、民族主義)、愛国主義、ナチズム(ネオナチ含む)、難民、移民、マイノリティなどの、近現代の国際問題とその歴史に関心のある人の積極的な参加を希望しますが、ナショナリズムに限らず、ひろくヨーロッパ文化に関心をもっている人も歓迎します。

皆さんの参考のため、これまで指導したことのあるゼミ論文や卒業論文は、おもに以下の近世～現代ヨーロッパ史です。たとえば、イングランドにおける女性の王位継承、選挙王政と世襲王政、フランス革命と絶対王政、ジャコバン主義、魔女狩り、神聖ローマ帝国とハプスブルク帝国の紋章、ハプスブルク帝国の民族問題、マリー・アントワネットとマリア・テレジア、現代スペインの言語政策、フリードリヒ 2 世の軍制改革、グリム童話とロマン主義ナショナリズム、ハンガリーとオスマン帝国、東欧におけるナショナル・シンボルの誕生、ロックンロールの誕生、ウィーンのカフェ、第一次世界大戦と帝国主義、ナチス・ドイツのホロコースト、戦後日欧歴史教科書比較、戦後ドイツのユダヤ人、シリア難民問題と EU、など。

## 【3 年生】

なぜ二つの世界大戦はヨーロッパで始まったのでしょうか？ なぜ近現代ヨーロッパの人びとは国民や民族(ネーション)のために命を賭してまで戦いあえたのでしょうか？ このような問いをたてるとき、必ず議論となるのが、そもそもヨーロッパの国民/民族は太古の昔から存在する共同体なのかどうか、あるいは、近代以降に創られた人工物なのかどうか、という論題です。現在の学説はふたつに割れています。前者は、国民/民族の起源を古代に置き血縁的・社会的連続性を重視する「原初論系本質主義」です。後者は、18 世紀の産業革命に際して国民/民族が構築ないしは捏造されたと理解する「近代論系構築主義」です。

近現代ヨーロッパ史研究において最大のテーマの一つとされる、近代国民/民族とそのナショナリズムの根源に関する研究方法(主に E・ゲルナー、B・アンダーソン、E・ホブズボーム、A・スミスの学説)を学び、近世後期以降のヨーロッパ文化を考察する際に必要な観点や諸学説の整理の仕方など、総合的な分析力を高めます。

## 【4 年生】

1980 年代以降のヨーロッパ・ナショナリズム研究は、近代論(modernization theory)と原初論(primordialism theory)ないしはエスノ象徴主義(ethnosymbolism)という図式のもとで論争が繰り広げられ、文化人類学・社会人類学・民族学・政治学・社会学・歴史学の領域を超えて世界レベルで深化しました。なかでも「近代論系構築主義」の文化研究には、カルチュラル・スタディーズやポストコロニアル・スタディーズも加わり、2010 年前後まで国民国家に関する論壇は活況を呈していたのです。しかし現在では、こうした盛況もいささか昔日のものとなりました。なによりも注視しなければならないのは、原初論・近代論ともに理論的な限界が指摘されはじめていることです。

本ゼミでは、両学説の内実を詳細に検証し、その利点と問題点を史料分析も交えながら把握します。これによって、文献を解読する際に必要な実証力や諸学説の整理の仕方など、総合的な研究力をさらに高めます。そのうえで、ナショナリズムのほか、愛国主義・自民族中心主義・排他主義・難民問題・移民問題・地域主義・EU の今後まで考えていきましょう。

## ICCO 文化交流創成コーディネーター

多元文化論系では、2017 年度より「ICCO 文化交流創成コーディネーター資格制度」を導入しました。論系で指定された科目を履修し、短期集中セミナーに参加することで、この資格を取得することができます。

詳しくは、多元文化論系ホームページに掲載している資料をご確認ください。また、多元の学生はコースナビから詳細を確認することができます。

### ICCO 文化交流創成コーディネーターとは

ICCO: **I**nter**c**ultural **C**oordinator 「文化交流創成コーディネーター」

「新たな時代や社会づくりに向けて、人と人、人とモノ、コトとコト、モノとモノ、地域と地域、地域と世界など、文化と文化のくあいだ>に  
つながりをつける力を備えた人材」 — 日本国際文化学会 HP より

### ICCO資格制度とは

日本国際文化学会が認定(2015 年度～)

「これからの時代が求める人材像は、特定の文化の枠組みの中で自分は何者かと考える人から、枠組みを超えて行動する人へ。国際文化学会は、様々な場で新たな文化の交流や創成に携わろうとする人を、インターカルチュラル・コーディネーターとして認定します。」 — 日本国際文化学会 HP より

### 資格の取得方法

1. 参加認定大学の学部・学科・系・コース等が指定する科目を選択履修する【A】
2. 短期集中セミナーに参加する(自費)【B】
3. 提出期間内に【A】の成績証明書と【B】の修了報告書類および審査手数料を国際文化学会へ提出
4. 審査を経て、「文化交流創成コーディネーター認定証」が交付される

### 期待できること

- ・ 多元文化論系指定科目の履修により、グローバルな視点から、地域交流、文化間交流の過去と現在について、幅広く学ぶことができる
- ・ 短期集中セミナーを通じて、日本各地から集まってくる学生たちと、大学横断的な交流が持てる(優秀者は、翌年の日本国際文化学会フォーラムにおいて発表する機会あり)
- ・ 将来、国際交流、文化交流にかかわる職業を目指す際のキャリアアップにつながる



# 多元文化論系 夏合宿

2017 年度は 9 月中旬に軽井沢セミナーハウスにて夏合宿を行いました。

2 年生を含む合宿実行委員によるゲーム・スポーツ企画、3 年生以上によるゼミ紹介および 1 年生による JCulP 紹介、ゼミ・学年の枠を超えたワークショップ、そして多元文化論系らしく世界各地の飲み物・お菓子・景品が集まった懇親会など、1 泊 2 日の短い時間ながら充実した内容となりました。学年の垣根を越えて、お互いに親睦を深めることができたようです。

2018 年度以降も夏休み期間中の開催を予定しています。



## 論系ホームページ

[http://www.waseda.jp/trns\\_cult/](http://www.waseda.jp/trns_cult/)



論系関係のイベント・講演会の情報を随時アップしています。



卒業生が昨年度提出した「ゼミ論題目一覧」が現在公開されています。  
先輩たちがどのような勉強をしているか参考にしてみてください。



論系やゼミの紹介、イベントの報告や、留学情報など、  
盛りだくさんのコンテンツとなっています。

## 論系 Twitter

<https://twitter.com/TagenBunka>



助手が最新情報をコンパクトに発信しています。  
イベントの告知などの情報も得られますので、ぜひフォローしてください。

## 2016年度 学位記授与式・卒業パーティー





## 多元文化論系室



33 号館(高層棟)9 階 906 号室

月～金 12:30～18:30 (水曜日の開室時間は要確認)



03-5286-2979



sdc.admin2007@gmail.com



[http://www.waseda.jp/trns\\_cult/](http://www.waseda.jp/trns_cult/)

\* 開室時には助教か助手が在室しています。お気軽にご相談やお問い合わせにいらしてください。